

Somnium Scīpiōnis

スキューピオーの夢〈語句と文法解説〉

Somnium: somnium, -ī n. (夢) の単数・主格。

Scīpiōnis: Scīpiō, -ōnis m. (スキューピオー) の単数・属格。Somnium にかかる。スキューピオー (185頃-129) の正式名は、プーブリウス・コルネーリウス・スキューピオー・アエミリアーヌス・アーフリカーヌス・ミノル (Pūblius Cornēlius Aemiliānus Scīpiō Āfricānus Minor)。カルターゴを破壊したローマの軍人でこの作品の主人公。147、134年の執政官。義理の祖父の大アーフリカーヌス (Āfricānus Māior) と区別して小アーフリカーヌス (Āfricānus Minor、236-184) とも呼ばれる。

(9)

Scīpiō: 'Cum in Āfricam vēnissem M.' Māniliō consuli ad quartam legiōnem tribūnus ut scītis mīlitum, nihil mihi fuit potius quam ut Masinissam convenīrem, rēgem familiae nostrae iūstis dē causis amīcissimum.

訳

スキューピオー「あなたがたも知るように、わたしが執政官マーニウス・マーネーリウスにとっての第4軍団の副官としてアフリカに赴いたのち、わたしたちの家にとって当然の理由から、もっとも親しい友であった王マシニッサを訪れるほどわたしにとって望ましいものはなかった。

語句と文法説明

Scipiō:

Scipiō, -ōnis m. (スキープイオー) の単数・主格。スキープイオーはガイウス・ラエリウスをはじめとする友人たち(『国家について』第1巻から議論を交わしてきた論客)に向かって自分の体験を語り始める。場所はスキープイオーの別邸、時は129年のラティナーエ祭(ラティナー族の古い祭式)の期間中。それは以下において明らかになるように、夢の中で義理の祖父大アフリカーヌスに出会ったエピソードであった。なおスキープイオーはこの年(129年)没する。

Cum:

cum は「時」を表す接続詞。ここでは接続法・過去完了(vēnissem)とともに用いられ、「～したあとで」と訳す。このcum は「物語のcum」(cum narrātivum) または「歴史的cum」(cum historicum) と呼ばれる(「中山」p. 297)。接続法・未完了過去ないしは過去完了を伴う場合、「理由」や「対照」など主文の動詞に付随する様々な「状況」を説明する。

in:

〈対格〉に

Āfricam:

Āfrica, -ae f. (アフリカ) の単数・対格。in Āfricam で「アフリカに」。Āfrica は音引きの原則に従えばアフリカと表記すべきだが、慣例を優先しアフリカと記す。いわゆるアフリカ大陸ではなく、146年にローマの支配下に置かれることになる「アフリカ属州」を意味する。具体的な攻略の目的地はカルターゴ。

vēnissem:

veniō, -īre (来る) の接続法・能動態・過去完了、1人称単数。Cum in Āfricam vēnissem で「わたしがアフリカに来(てしまっ)たあとで」、すなわち「わたしがアフリカに来たあとで」。主文の動詞 fuit は第2時称(直説法・完了)。cum の導く従属文の内容は主文に比べ「以前」と判断されるため過去完了になる(「時称のルール」)。スキープイオーがアフリカを訪れたのは149年(第3次ポエニー戦争勃発の年)。

「スキープイオの夢」(現代語訳)

9 スキープイオ⁽¹⁾「わたしが執政官マーニウス・マーネーリウス⁽²⁾率いる第4軍団副官としてアフリカに赴いたことはみなさんご存知のことと思う⁽³⁾。そのさい、わが一族にとっては当然のことであるが、無二の盟友マシニッサ王⁽⁴⁾に面会できたことはこの上ない喜びであった。王宮を訪れたとき、老王はわたしを抱いてひどく涙したが、ほどなく天を見上げて言った。

『至高の太陽よ、わたしはあなたに感謝したい。そして天上の他の神々よ、あなたがたにも感謝申し上げる。この世を去る前に、わが王国とこの屋根の下でプーブリウス・コルネーリウス・スキープイオにまみえることがなかったからだ。その名⁽⁵⁾を聞かたびわたしは生き返る思いがする。このように、あの天下無敵の英雄⁽⁶⁾の記憶は、わたしの心から消え去ることはない。』

それから、わたしは彼の王国について尋ね、彼はわたしたちの国家⁽⁷⁾についてくわしく尋ね、こうして互いに多くの言葉を交わすうちに一日も終わりに近づいた。

- (1) 小スキープイオ (BC185頃-129) のこと。スキープイオは義理の祖父大アフリカーヌス (別名大スキープイオ) と区別され、小スキープイオと呼ばれる。
- (2) BC149年の執政官。第3次ポエニー戦争 (BC149-146) に出征。
- (3) スキープイオは第3次ポエニー戦争に従軍した際のエピソードをラエリウスをはじめとする聞き手に語り始める。場所はスキープイオの別邸で時はBC129年。
- (4) ヌミディア王 (BC240頃-148)。スキープイオと面会したときの年齢は90歳前後であった。
- (5) スキープイオの名はマシニッサ王が友情を温めた大スキープイオ (すなわち大アフリカーヌス) の名を思い出させるものであった。
- (6) 大アフリカーヌス (BC236-184) のこと。
- (7) ローマのこと。

10 そのあと贅を尽くした王のもてなしに歓待されてさらに夜遅くまで話

しこんだが、そのさい老王はアフリカーヌスについて以外何も語らず、その偉業だけでなく、交わした言葉のすべてを追憶した。それから、わたしたちは眠りにつくため部屋を出たが、旅路に疲れ、夜遅くまで起きていたため、いつもより深い眠りがわたしをとらえた。このときである、目の前にアフリカーヌスが姿を現したのは。老王と語りあった内容が祖父と合わせてくれたのだろうか。実際、日中の思考や会話がもとになり、このような現象を夢の中で経験することはよくあることだ。ちょうどエンニウス⁽¹⁾がホメーロス⁽²⁾との出会いについて語っているようなものである。言うまでもなくエンニウスは起きているときにはホメーロスのことばかりを考え、ホメーロスについて語るのを常とした。ただし目の前のアフリカーヌスは生身の姿ではなく、肖像をつうじて見覚えのある顔かたちをしていた。その姿を認めたときわたしの心は震えたが、しかし祖父は言った。『落ち着くように。恐れを捨てるがよい、スキープオーよ。そしてわたしの話すことを記憶に残すように。』

(1) ローマの詩人 (BC239-169) で『年代記』の作者。

(2) 『イーリアス』、『オデュッセイア』の作者とされる紀元前8世紀のギリシアの詩人。

11 おまえには見えるか。ローマ国民に従うようわたしに強いられながら、以前の戦争⁽¹⁾をふたたび始め、平和を守ることのできない都のことだ。』

そう言ってアフリカーヌスは星々で一杯の、明るく輝く、とある高い場所⁽²⁾からカルターゴを指さした。

『それを攻囲するため、おまえはいま一兵卒に近い者として来たにすぎないが、この2年のうちに執政官になり、この都をくつがえすだろう⁽³⁾。そしてこれまでわたしから相続したものとしてもつその添え名⁽⁴⁾を、今度は実力によって獲得することになろう。さらにおまえは、カルターゴを破壊し、凱旋式を行い、監察官となり⁽⁵⁾、使節としてエジプト、シリア、小アジア、ギリシアを訪ねたとき、不在のままふたたび執政官に選ばれ⁽⁶⁾、最大の戦争を終結させるとヌマンティアを滅ぼすだろう⁽⁷⁾。しかし、凱旋車でカピトリーウムの丘に乗り入れるとき、わたしの孫⁽⁸⁾の策謀によって国家が混乱に陥っているのを見出すことになる。』